

意外な泡盛の利用法

日本には、「酒は百薬の長」ということわざがあります。江戸時代（1603-1868）には、泡盛は手に入るアルコールとしては最も度数が高く、薬用や実用に重宝されました。泡盛は子供の切り傷やすり傷の消毒に使えたため、嫁入り道具に含まれることもありました。また、胸やけをすっきりさせる、痰を取り除く、風邪を予防する、回虫を駆除する、目の充血を直す、尿の通りを改善するなどの目的でも使われていました。

17世紀後半から、武士は泡盛をお酒として楽しむだけでなく、刀傷を消毒するのにも使うようになりました。持ち合わせの泡盛がなくなった時は、代わりに酒粕を蒸留した酒を飲んでいたと記録されています。

沖縄では、泡盛の香りは病気を追い払うと信じられていました。そのため、人々は天然痘などの疫病が流行した際には、顔と指先に泡盛を塗っていました。女性や子供を含む一部の人は、泡盛を薬として飲んでいました。病気が流行っている時には、訪問客にお茶の代わりに泡盛を出すこともありました。沖縄の宗教儀式で使われる泡盛は、「ぐし」と呼ばれることがあります。一部の言語学者は、この単語は日本語の「薬」という語と同じ語源を持つとしています。